

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	Katrina San Juan NAVALLO
論文題目	Paid to Care: The Ethnography of Body, Empathy, and Reciprocity in Care Work Among Filipinos in Japan (有償でケアする —在日フィリピン人介護職における身体・共感・互酬性の民族誌—)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、日本の高齢者施設で介護労働に従事するフィリピン人移民労働者が、経済連携協定を始めとする両国間の様々な仕組みによりどのように来日し、本国で取得した資格と必ずしも合致しない介護労働に、低給与で厳しい労働条件のもとで従事することによどのような意味を見出すのかを明らかにする。日本国内二ヶ所の介護施設における参与観察、および2017年4月から2019年6月までの50人のフィリピン人介護労働者へのインタビュー等による調査をもとにしている。</p> <p>本論文は8章と結論からなる。第1章序論では、研究の問いと背景や概要を提示する。日本で介護に携わるフィリピン人移民労働者について、マクロな移民政策や雇用政策の動向のなかで彼ら自身の経験を問うとともに、彼らがどのような技術や理想をもって来日し、日本で介護労働がいかに構築されるか、そこで彼らが職場で様々な関係を形成し、仕事に意味を見出していく過程をミクロな視点から検証するという論文の問いと構成を示す。第2章では、論文の理論的背景と諸概念を提示する。有償のケアやケアの倫理に関わる議論、労働としてのケア、ケアの互酬性や身体性をめぐる議論の中で本論を位置づける。第3章では、調査の方法論を示す。介護労働者が送り出されるフィリピン側の訓練施設や、日本で彼らが雇用されている近畿と九州の二ヶ所の特別養護老人ホームでの参与観察やインタビューを実施したことを、施設の概要とともに説明する。</p> <p>第4章以降は、介護労働者がフィリピンで訓練を受けた後に来日し、施設で働き始めて入居者と関わっていく時間的プロセスをそのままたどる構成となっている。第4・5章は、まずトランスナショナルな空間においてケアが労働として形成される制度的な側面について検証する。第4章では、日本の圧倒的な介護労働力不足に対応して移民、福祉、雇用をめぐる諸政策の多様な組合せから、介護労働者の来日には複数の経路があること、それらを通じて移動するフィリピン人および、長期滞在者として日本に在住するフィリピン人らが同じ介護労働に従事していることを述べる。そのうえで、両国におけるケアの職業的定義の齟齬や日本の受入れシステムが、介護労働者の職業的役割や責任をめぐる理解に葛藤をもたらしていると論じる。第5章では、両国におけるケア労働をめぐる訓練と資格の相違から、フィリピンで看護師の資格を持っている場合でも来日後に介護福祉士として再訓練を受け、日本語能力においてハンディを背負い、専門的な管轄も限定されることから、</p>			

職業上の下方移動に甘んじざるをえないことを論じる。彼らは技能や資格はなくても言語能力のある長期滞在者が有利な状況で、本国で得てきた資格、地位や階層、社会的アイデンティティを剥奪され、資格に見合わない労働に従事していることを指摘する。

第6～8章は、実際の施設における、フィリピン人介護労働者をめぐる諸関係に目を転じる。第6章では、日本人職員との不平等な関係のなかで、フィリピン人労働者が日本の施設における仕事の仕方や上下関係、自らの言語能力や文化理解が不十分なために生じる軋轢にどのように対処しているかを問う。現場で求められるのは彼らの労働力であり、「人種」的な差異が日本人同僚との関係を規定していると指摘する。両国の仕事上の倫理、職業観の相違や、階層関係のなかで他国にあって疎外感を味わうフィリピン人がどのように日本で求められる介護労働を身につけながら適応していくかを論じている。

第7章では、フィリピン人労働者が日本の施設で介護労働を身につけながら、身体的要素を介して高齢入居者との間に日常的に形成する相互関係について考察し、両国におけるケアの在り方の相違を身体性という観点から検討している。彼らが身体を介した親密な相互関係を通じて自らの家族を念頭に高齢者に共感していると指摘し、有償のケア行為が身体性を介して「人種」的な差異を超える関係性の形成の可能性をもつことを指摘する。

第8章では、フィリピン人労働者がケアの職業化のもたらす限定性のなかで葛藤しながらケアの受け手との互酬的關係を築いていることを論じる。彼らは、福祉体系や介護労働の在り方も大きく異なる日本で、職業的アイデンティティを剥ぎ取られ、低賃金で困難な労働に従事し昇進の望みもなく、また移民労働者として不平等な立場に位置づけられる。それでも、日本の高齢者施設で身につける介護労働に自らのケア実践を盛り込んで、高齢者との身体性を介した親密な関係性を築く中で高齢入居者から受ける評価や、日本社会における価値づけにより自らの労働に意味を見出すと結論する。

(論文審査の結果の要旨)

新自由主義のグローバル化のもとで、移民労働者が先進諸国の豊かな高齢者の介護を担うケアのトランスナショナル化が進行するなかで、既存研究は女性を主とするケア労働者の労働搾取や不安定性を強調してきた。一方、日本の介護現場では外国人による介護は受け入れられにくいといわれてきた。本論文は、日本における50名のフィリピン人介護労働者のインタビューと、その労働の場である国内二か所の介護施設での参与観察に基づいて、移民労働者が日本における介護労働の制度と現場をどのように経験しているかを民族誌的に検証する。そしてマクロな両国の送付と受入の制度的な関係と、ミクロな介護現場で形成される諸関係の両方を、労働者の視点から捉え、日本におけるフィリピン人介護労働者の経験の特質と問題点を浮き彫りにしている。

本論文の学術的貢献として以下の点があげられる。

第一に、移民労働者はその知識や資格、経験が多様であり、送付と受入の相互関係から組織された複数のシステムによって来日するが、ケアワークをめぐる両国の定義の相違が、熟練技術と単純労働の間で職業上のミスマッチを引き起こしてきたことを当事者への聞き取りを通じて検証している。看護師資格をもつ来日労働者が、経済連携協定のもとで再度訓練を求められるなど、多くの者は自らの職業的な資格や能力、地位や階層の下方修正と低給与に甘んじる。その一方で、同じフィリピン出身でも資格や訓練を受けていない長期滞在者は日本語能力や渡航ステータスなどが有利にはたらき同じ職を得ている。このように受入国日本において、本国で取得した資格や技能が認められずに労働に従事せざるをえない齟齬と葛藤の経験について解明している。

第二に、来日した移民介護労働者は、訓練により汎用性のある技能を身につけるといっても、本国のケア体験とは異なる日本の介護施設という特殊な現場における介護実践と日本語能力とを身につけて、身体的に負荷の大きい労働に従事することを求められる。そして訓練期間を終えて資格を得た場合でも、長期に日本に留まり介護労働に従事する選択をする者はなく、したがって制度そのものは将来的な人材育成という機能をはたしていないという問題点を指摘している。

第三に、介護労働に従事する高齢者施設では、移民労働者は日本人同僚から階層的劣位におかれ、その能力は日本語能力や労働環境への適応度によって測られる。そうした不平等な状況にあっても彼らは施設の規律や制限に適応しつつ、自らの能力を発揮するための工夫により、ケア実践に従事していることをインタビューや観察から検証している。こうした職場における「人種」間関係と労働者の実践に関わる議論は、他の労働現場との比較や適用も可能である。

第四に、参与観察と聞き取りに基づく民族誌的記述により、フィリピン人移民介護労働者と、介護の受け手である日本人施設入居高齢者との関係性を描出し分析している。

フィリピンでは、ケアといえば家族的な場面での親密な関係性によるものであり、彼らは日本の介護施設が求める規律のなかで可能な限りこれを実践することを通じて、高齢者と相互関係を築いていることを、特に身体性に注目することによって明らかにしている。祖国や家族から離れて日本における外国人労働者として経験する疎外感を、家族から離れて施設で生活する高齢者に重ねて、共感を交えて介護に従事することで、給与による経済的な見返りだけではない労働の意義を見出し、自らのおかれた状況に耐え、立場や居場所を確保していると論じている。

以上のように本論文は、日本とフィリピン二国間の移民ケア労働者の受容と雇用をめぐる複数のシステムが、彼ら自身にとってどのような労働形態、資格や技術に対する雇用の現実をもたらしているかを明らかにしている。同時にこれを労働搾取の関係とのみとらえるのではなく、介護施設で生じる諸関係、特に身体化された親密なケア関係とフィリピン人ケア労働者の労働意識の関わりについて、彼らの立場に寄り添い記述分析している点で、オリジナリティの高い貢献である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2020年1月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。